真室川空襲時の頃の話

佐藤　栄一　（八十七歳）差首鍋在住

八月　国土防衛隊が組織され、一個中隊二百人位で真室川飛行場にて訓練を始めた。地元に残っていた男性が赤紙で集められたそうです。

重機関銃はもとより軽機関銃も無く、もっぱら木銃での訓練であって空爆に対しては全く要の為さないものであった。真室川空襲の前、一週間位行われたそうです。渡部佐重さんや小向の人（名前不明）等が参加したと聞いています。

総理大臣を務めた小磯国昭氏が、こちらに来たとき「竹槍などでアメリカに向かったって駄目だ」と話して云ったそうです。

空爆は朝から始まり、八千代橋の川下に2発ぐらい落として行ったのを見たそうです。及位方面から飛来して鮭川の方に向かった。数は数えなかったが、かなりいたように思えた。

真室川飛行場で、練習生の手紙の検閲をした

（対応　伊藤正三　パソコン　五十嵐博子）

星川　すみこ　（五十八歳）

あれは昭和十九年の夏、雨の夜だった。真室川町野々村地区にあった宇都宮飛行機学校分校の見習士官生が、特攻隊になるため軍用特別列車で出発していった。ざくざくという音を立てながら駅までの行進が続いた。こんなに若いのに、と思うといたたまれなくなった。

私は十八年春から十九年まで、分校の飛行場で事務をしていた。練習生に家族から来る手紙や、出す手紙の検閲の仕事。例えば「何月何日にどこどこへ行く」とか「金を送れ」などの文面があった場合は手紙を差し止めた。中にはこっそり「これ頼む」なんて持ってくる人もいて、そういうときには黙って町の郵便局に投函したこともあった。見送りながら、いろいろな想い出がよみがえった。

練習生は学徒動員で来た大学一、二年生がほとんど。私は女子職員の中で一番若かったから、かわいがってもらえた。

練習生は、赤トンボと呼ばれる二枚羽根の練習機に乗って近くを旋回したもんだった。練習後、顔を合わせると、「君の家で今日、布団干していたね・赤い布団だった」なんて声をかけられ、ほおを染めたりした。

練習は厳しかったようだ。練習生がスリッパで顔を殴られることもしばしばあった。伍長や曹長クラスの年配の教師たちが大した理由もないのに殴る。そうすると、「今に見てろ」なんて悔しがる練習生もいた。だって卒業すると、少尉になる人たちだから。

練習中に、練習機が墜落して死ぬ人もいた。近くの正源寺という寺で通夜、宿舎では仏教関係の学校の学生たちが念仏をとなえたものだった。いくら戦争とは言っても、母親など家族は棺にしがみついて泣いた。私も、ついもらい泣きしてしまった。

二十年八月十日。私はすでに飛行場の事務を辞め、国鉄真室川駅に勤めていた。ホームで朝の体操をしている時だった。空を見あげると、飛行機が見えた。しかし、いつもと様子が違った。翼が一枚しかない。飛行場の本部に問い合わせて、敵機とわかった。そのうちだれかが半鐘を打ち鳴らし出した。防空壕に入ったが、敵機は急降下して来て、ダッダッダッと機銃掃射。本当に生きた心地がしなかった。

（朝日新聞社）パソコン　五十嵐博子

私の見た真室川爆撃

沓澤　靖男

私は、真室川爆撃のあった昭和二十年に農兵隊（食糧増産隊）最上中隊第三小隊に所属しており、主として山形県内の農場、又は建設現場で働いておりました。

爆撃の当日（八月十日）は、前日から第二小隊宿舎の豊田小学校に伝令として来て泊まっていた。十日に自宅に帰り、十一日に第三小隊宿舎のある古口に帰る予定であった。

十日の朝。他の隊員達が作業に出発して間もなく、真室川方面から大きな爆音をたなびかせ飛行機が飛来してきた。私が二階にいて窓の内から見たのはアメリカの軍用機、クラマンＦ６Ｆであった。当時、新聞紙上で何回も見ているので間違いないと思った。

すぐ目の前を低く通り過ぎて行くので搭乗員の兵もほぼ解るほどでした。二人位乗っていたようでした。どの辺で戻ってきたのかは解らなかったが、京塚地区上空に現れ、それから穏やかに真室川方面に降下していき、急降下して黒い爆風と共に上昇して、又、小学校まえを通り其の繰り返しであった。それがどのくらいの時間であったかは定かではない。

爆撃の後自宅の方に急いだが、途中豊里、真室川での変わった事はなかったようですが、秋山の現中学校前でスコップを担いだ大人の男十数人と出会いました。後で飛行場の復旧作業に動員された方々と聞かされました。

そして上野地区まで来たとき第二波の爆撃の飛来を見つけました。機数については、七十年も前のことですので定かではないが、余り多くはなかったようでした。

第三波の爆撃は、旧安楽城役場前で見ました。機数は確かな事は解らないが、三機編隊でほぼ五群位ではないかと思います。且つその時一機が、大きく右側に方向転換して、野崎館跡の近くにあった監視所の方に機銃掃射があった。わずか数秒間の短い時間であった。

私はその後急いで自宅に帰りましたが、中村からはその後の機影はみえなかったが爆撃は夕方近くまで続いたような気がします。全体で何波の攻撃であったかは解りませんでした。

自宅に泊まった次の日、私は歩いて真室川駅に行き、古口に汽車で向かいましたが鉄道には何も被害が無かったようでした。その後、間もなく終戦になり、真室川飛行場にあった軍用物資の残りを新庄地内の大きな倉庫（近岡の倉庫と聞いた様な気がします）に移す作業に約一週間関わりました。私は直接飛行場の方には行かなかったが、新庄の倉庫で仕分けや整理の仕事をしました。主な品物で一番多かったのは、魚の缶詰、鮭の缶詰など何百ケースもありびっくりしました。その他、セメント、細長い一分厚さ位の鉄板でした。

余談になりますが、私が今から十数年前新庄の県立病院に入院したとき、一緒の部屋で隣のベッドに居たのが円満寺住職（現市長、山尾氏の父）でした。山尾さんは、当時真室川飛行場に訓練兵として居たそうです。特攻隊員としての訓練だったと聞いております。毎日がアメリカの軍艦に体当たりする訓練ばかりだったようです。残念ながら飛行場爆撃の話を聞くことは出来ませんでした。

（対応　伊藤正三　　パソコン　五十嵐博子）

そして空襲が終わった頃、飛行場の兵隊が自宅に来て、敵機が又やってくると教えました。

十二時半頃、再びグラマンが十四、五機飛来し、航空本部に爆弾を下ろし破壊しました。しかし不思議なことにその近隣に建てられている兵舎や格納庫は破壊されずに済みました。米軍は格納庫に飛行機はないと確信していたのか、それとも練習機なので影響ないと考えてのことか。

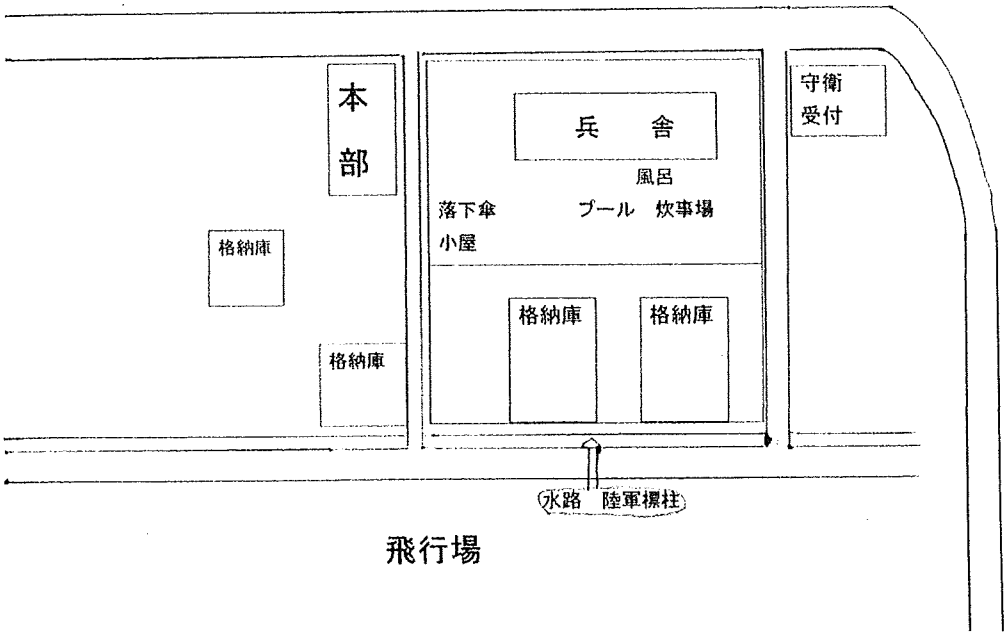
私たちの近隣には防空壕がなく、約三十人で内町薬師様（神社）に逃げました。空襲が治まって家に帰ると、爆風で土間の板敷きが剝がれ飛んでいたり、干していたジャガイモが到るところに散在していました。

午後三時半頃、三回目の空襲があり、約五〇機程、飛行場近隣を飛び回った。神ヶ沢の松沢さん宅や真室川駅前東側の材木場などが被害を受けたようだ。

私の家族は飛行場の脇に住んでいることに危険を感じて、その夜は鮭延城跡の東側、七滝辺りの「さ坂」に一晩隠れました。そして次の日からは親戚の新庄柏木山に行き、三日程泊めてもらった。本当に戦争はしてもらいたくない。学校に行っても勤労奉仕ばかりで、旅行にも行けなかった。

（対応　杉原実、佐藤栄一、梁瀬平吉）

真室川飛行場建物図



真室川空襲聞き書き

平成二十六（二〇一四）年十月

樋口行男　新庄市赤坂　八十二歳

私の家族は西置賜（白鷹町）から昭和一年度（十六軒で今も変わらない）に入植した。空襲のあった八月十日は、昭和開拓のリーダーであった高橋猪一氏（加藤完治の弟子）が満州開拓にまわされ、発疹チフスで亡くなったので、昭和主催で葬式をする予定であった。午前中の空襲で葬式騒ぎでなくなり中止となった。また疎開していた真室川飛行場の兵隊は、空襲を察知していたのか、何処に行ったのかわからなくなった。

私は昭和二十年三月泉田小学校を卒業して青年学校にいた。体の大きい同級生は志願して戦争に行ったが、私は行けなかった。

この空襲の日、最初おかしい飛行機が飛んできたので、昭和三年度の講堂に青年団や少年団など多くの人々が集まっていた。それが十時頃から本格的に杢蔵山の上から下って爆撃が始まった。午後に、昭和三年度の曲がり角の防風林近くに爆弾が落とされて大きな穴が開いていると聞いて、仲間五人でその後を見に行った。ところがその近くまで行ったら突然グラマンが現れた。私たちは近くの防風林（赤トンボや燃料の油などを隠していた）に逃げようとしたがもう敵機が来たので、草むらの中に身を隠した。防風林に隠してあった物を発見され空襲を受けたら命はなかったであろう。家に帰ったら親にひどく怒られたことを覚えている。

その時の空襲では、昭和三年度の防空壕に隠れていたその入口付近で機銃掃討を受け、中の五人が窒息死したと聞いている。昭和二年度から三年度の松林に隠してあった練習機赤トンボを発見され空襲を受けたら、私たち五人はおろか相当の被害を被ったことであろう。

戦後間もなく、新庄から車（トラック）で防風林に隠してあった油や飛行席の計器など全て盗まれていた。残された物は木製飛行機の「木」の部分のみであった。

そのころ昭和でとれる物はカボチャとトウモロコシばかりであった。トウモロコシを乾燥させ、実を一つ一つ取り北海道に売った。しかし、値段は労働に見合うものでなく安かった。この戦争は昭和開拓にかけていた人たちを一層暗いものにした。

（対応　梁瀬平吉）

平成二十六（二〇一四）年十一月

黒坂貞雄　真室川町野々村　八十三歳

私は昭和二十年三月に真室川尋常小学校高等科を卒業して、自宅で農業に従事していました。そのころから飛行場の兵隊が私宅で七、八人間借りをしていました。その中の静岡県から来ていた青柳忠治という兵隊が、私を飛行場に連れて行き、赤トンボによく乗せた。私宅が飛行場の隣であったので、私の少年時代の思い出は真室川飛行場と共に歩んだといっても過言でありません。

八月十日八時半頃、グラマンが川ノ内方面から上昇して飛行場に向かってきました。野々村（部落）の杉林や松林に隠しておいた赤トンボ約四、五拾機。その一角に爆撃を受け、四機破壊しました。私はこのことでようやく空襲だとわかりました。飛行場近隣を約二時間程飛んでいたように思います。この最中に当村の一郎家の親子のベゴが逃げて仔牛が撃ち殺されました。